

書評

臨床心理学書から

はじめに

今日の臨床心理学の対象は、現代の社会状況の中の全體としての人間ないし人間性の探究が大きな位置を占めるに至っている。したがって臨床心理学と密接に関連する精神医学や社会学といった隣接諸科学の理論や方法論は言うに及ばず、芸術、宗教、倫理などの知見も含めた総合領域にわたる臨床心理学が必要とされていることは言うまでもない。こうしたとき、編集部から書評をするようにとのお話をあり、一体どこに視点を定めたらよいのか、視点など定められるのだろうかとその任の重さを改めて認識させられたしたいである。とはいえ、「群盲象を評す」のたとえに陥ることを恐れつつも、浅学な一臨床家の目を通して、私なりの感想を述べさせていただくことをお許し願いたい。

中井久夫・山中康裕編 *思春期の精神病理と治療*
岩崎学術出版 1978

ここ数年青少年の自殺や非行が特にマスコミを賑わせている。未来に広がる光に照らし出された無限の可能性と、寸時たりとも垣間見ることさえ恐しい暗黒の深淵が共存する彼らの世界は、ノルウェーの画家エドヴァーアル・ムンクの「思春期」に象徴的に表現されている。中央に身体をこわばらせ、眼をみひらいて腰かけている裸の少女。その背後にのびる黒い影は、無気味な魔性をもった‘なに者’かの存在を感じさせる。こうした思春期、青年期の精神病理に関する多くの専門書の中で、本書はその治療、即ち精神療法の過程までもが詳細に記述されている点は、1つの大きな特徴である。

構成は臨床場面に携わっている新進気鋭の精神医学者および臨床心理学者12名の分担執筆の形をとり、その内容は思春期、内閉 Juvenile Seclusion、分裂病から見た思春期、前思春期および思春期のうつ病、てんかんと思春期、思春期の離人症、思春期のある心身症とスティグマ、思春期と境界例、思春期における食事の障害、思春期の心理(自我体験の考察)、退却神経症 Withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱、思春期における自己と身

体、と思春期の精神病理のかなりの領域が網羅されている。ここですべての章について取りあげることは紙面の関係上無理なので、その中から2～3の章に焦点をしぼってみたい。

II章「思春期内閉 Juvenile Seclusion——治療実践よりみた内閉神経症（いわゆる登校恐怖症）の精神病理——」は興味深い。執筆者は「学校恐怖症」「登校拒否」という名称を用いず、あえて「内閉神経症」を提倡しておられる。不登校の子どものほとんどが学校を恐怖しているわけでもないし、登校を拒否しているわけでもなく、「学校へ行かねばならぬ、行きたいのに行けない」という強迫的心性をもっているというのがその理由の1つである。さらに某県下の小中学校において本症の予備調査を行った結果から、その中核構造をなす特性は①登校強迫、②引きこもり、③性同一性拡散、④先取り的思考、⑤高い自尊心、⑥興味限局などであり、登校、不登校のいかん、心気症状の有無などはむしろ現象的なものであるとみている。したがって本症の神経症内での位置は、強迫神経症、不安神経症のいずれでもなく、また境界例を経て分裂病に近接するケースもあることからみて、(成因論の方からではなく、治療実践の立場から)新たに‘内閉’の概念のもとに‘内閉神経症’という名称を用いている。

ここで当然の帰結として治療の基本が問題になってくるわけだが、執筆者はそれを、患者の内閉ができるかぎり保障し、もっぱら彼らの話に耳を傾け、内的な旅の同行者として付き合い、夢や絵画などのイメージの展開や、読書とか音楽鑑賞など彼らの限局した興味の窓を尊重し、それを通じての体験を共にしたり、甲虫や小鳥を育てていくといった象徴的な成熟の過程を共にすることが重要であると言う。こうして、「……彼らの《内閉》を保護し支えていくうちに、何らかの外的な事件が、シングロニック自我の成長と共に起ってき、それに対して患者が適切に関わることが可能になると、それまでの《内閉》の状態を蟄脱して、新しい状況へと巣立ち変容していくのが眼のあたりに見られる。このとき、事態は変じて、当人は登校をおのずと始めたり、全く新しい試みへと立上っていくことが多い。」と述べている。この立場はユングの分析心理学のアプローチにかなり近いと思われる。実際、症例として報告されている2例の治療過程

でも、患者の夢や象徴的イメージをとても大切にされ、執筆者の治療に対する真摯な姿勢をうかがわせる。なかでも15歳の少女の症例は読む人の心を捕えずにはおかないと。彼女と治療者との100通近い手紙のやりとりの中で、針の穴ほどの小さい窓を通して、信頼に足る治療者に心からのメッセージを伝え、彼女はまさに自分の影との戦いを勝ちとつていったと言えよう。ただ治療過程で重要な役割を果していた夢や象徴的イメージに対して、治療者である執筆者が何を感じ、何を理解されたかというコメントがなかったのが残念である。もしそれがつけ加えられていたならば、より一層説得力に富む症例になったであろうし、我々が最も知りたい所もある。

Ⅲ章の「分裂病からみた思春期」は分裂病者にとって思春期はいかなる意味において危機となりうるかという点を中心に考察しながら、思春期の一側面を明らかにしようとしている。ことばが理解できる以前に前言語的、身体的レベルで世界が子どもを受け入れることにより、子どもはまず自分をいい子に同一化する。いい子へと自己同一化できることは、この世界に存在する根拠であり、人間的生命、生きていく力を賦与されたことであると言う。したがってこの同一化があるからこそ、思春期に初めて顕在化する世界的一般性（他者一般）、超越性を肯定的に位置づけ得ることになる。そこでたとえ思春期に様々な絶余曲折はあるにせよ、基本的には世界と自己自身を是とし、肯定されている一般性に裏打ちされて個々の他者を位置づけ得る、と執筆者は言う。

これに対し分裂病者、特に破爪型分裂病者は、いい子への自己同一化が基本的に欠如し、その子にとって世界は開かれておらず自己の存在根拠を欠いている。彼らにとって思春期に出現する一般性は何ら構造化されていない他者世界にいきなり出現することになり、しかもそれは彼の存在を是とするものではないと考えている。それゆえ相手からの拒絶は他者一般、全世界からの拒絶であり、彼らの世界は崩壊しやすく、相手との間に安心は持ち得ない。したがって彼らは思春期を乗り切ることができず、思春期状況そのものが彼らを発病させると説明している。こうした考え方方は、単に分裂病者の妄想世界にとどまらず、思春期に特有のあの荒漠として無味乾燥な内的世界を理解していく上においても、深い示唆を与えてくれるものであろう。

X章「思春期の心理——自我体験の考察——」は執筆者の中でただ一人臨床心理学者の手による論文である。前半では青春期を身体的発達および心理的発達の面から区分され、後半で何人かの著名な人物の体験記や自殺した青年の詩などをもとに、自我体験を詳細に検討されて

いる。自我体験とは自分を自分自身に深く基礎づけるものであり、このとき自我は周囲の束縛から解放され独立し、自分の内的世界を開ける。それは外的世界とは異なり豊かなひとつの世界を形成する。こうした体験は、思春期には往往にしてみいだされうるものであるとその特徴を述べている。しかしその反面、「自我の意識性があまりにきわ立って客観的態度が強くなるとき、自我はまわりのものから離れてゆき、自我意識のみ強くなって、基礎づけが弱くなつて不安定となり、危機的状況に陥るのではないかと思われる。」と、自分が自分であるということを体験することの危機性を強調されている点は注目に値する。つまり自我体験がときとして離人体験や自殺を伴う危い体験でありながら、眞に個人の独立を支え、その人の一生の方向づけをするのは、内なる自己の認識が絶対的な安心感とエネルギーを与えるからではないだろうか。言いかえるならば、日常的自己を越えた感情、精神性、存在性が体験されること、深層構造に根ざした自我の強さ、交わりによる内的充実が不可欠であり、こうして初めて、自己が確立しながら同時に開かれていく過程を展開していくことになると思われる。この点で病的体験とははっきり区別されなければなるまい。

XI章「退却神経症 Withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱」は副題にもあるとおり、スチューデント・アバシー第二報として書かれている。執筆者がそれまで「スチューデント」アバシーと呼んでいた、うつ病とは異なる「特有の無気力」を主症状とするケースは、必ずしも大学生とは限らず、ひろく高校生からサラリーマンにまでわたることがその後の臨床経験から多くみいだされたのが、「第二報」と副題がつけられた所以であろう。そして従来の無気力反応とかアバシーという症状レベルの名称にかわる、より構造的な造語をこの病態の特徴づけのために用い、「退却神経症」という名称を提唱され、不安神経症や強迫神経症、抑うつ神経症やヒステリーと並列さるべき新しい神経症類型を示す名称であることを意図しておられる。ここ5年間に執筆者自身が直接診断し、本症類型にあたると診断した47ケースについて概要を述べ、さらに精神病理学的特徴にまでふれられている。

以下箇条書きにすると、(1) 几帳面、くそ真面目、完全主義といった（病前）性格における強迫的傾向がみられる、(2) 優勝劣敗への過敏さ、(3) アイデンティティ葛藤と進路喪失、(4) 分裂病や躁うつ病のように生活全域からの退却ではなく、主に本業部分からの部分的退却と、副業的生活領域や趣味への没頭などであり、最後にうつ病との関係が論じられている。このように長い年月にわたって1つのテーマととりくまれ、より

妥当性、信頼性に足る理論の発展を試みられる執筆者の努力には敬意を表したい。

最後の「思春期における自己と身体」はユニークであり、かつ示唆に富んでいる。執筆者はいう。「自己といふものは、ほぼ3歳前後に位置づけられている経験的な自他分離の確立をまってはじめて活動を開始するものではない。自己はいわば自他分離以前、個別的自己成立以前の‘先史時代’をもっている。この先史時代には経験客体としてのノエマ的自己はもちろんまだ成立していない。この時代において活動している前経験的自己、あるいはいいうならば‘前自己’は、のちに思春期に至って‘再発見’されることになるノエシス的自己そのものなのである。」そして論述をさらに展開し、「自己とは、元来はいかなるノエマ的対象化をも拒む純粹にノエシス的な‘はたらき’であり、なんらの固定点をもたずに随所に主となる絶対に自由自在の志向性である。しかし、そのような自己が個的存在としてこの世に実存しうるためには、自己は不本意ながら身体的存在という、したがってまた時間的、空間的存在というノエマ的限定をこうむって‘もの’とならねばならぬ。」と言う。したがって思春期の大きな特徴は、ノエマ的・‘もの’的自己とノエシス的・‘はたらき’的自己との分離、二重化が起り、前者が後者によって常に先立たれているという点にあると結論づけている。

ご存知のとおり、従来の常識的な個人的自己の枠組みを基準とする限り、自己超越体験や宗教体験、および分裂病者や離人症患者の病的体験にアプローチしていくことは想像に難くない。その意味でこのノエマ的自己、ノエシス的自己の概念はより広い自己の概念を理論的に設定し、そうした体験にアプローチしていく際に非常に有効であり、執筆者のすぐれた見識をうかがわせる。ただ初めてこの概念にふれられる方にとっては少々難解に感じるかもしれない。その点は執筆者（木村敏氏）の秀作『自覚の精神病理』（紀伊国屋書店）、『人と人との間』（弘文堂）に譲ることにする。

以上、ここでとりあげたのは本書に収められている論文の半分にも満たなかつたが、どの論文からも思春期に特有の心性が明瞭に浮かびだされていると感じられた。

鎧幹八郎著 試行カウンセリング 誠信書房 1977

本書は『臨床心理学実習』倉石精一編、誠信書房 1973) の続編として書かれている。‘まえがき’で「カウンセ

リングを学ぶ方法には大まかに二通りあろう。カウンセリングの雰囲気を肌で感じるようにして、その呼吸を汲むという形で学んでいく方法と、カウンセリングの中におけるカウンセラーとクライエントの言語的やりとりを細かく分解し、その構成要素を明確にして、更に構成要素に従って、組み立て直していくという方法と。私達は、第二の方法を選んだ。」と筆者が述べているように、カウンセリングや心理療法を学ぼうとしている人のための実習的要素が強い。

第一章から第五章まではカウンセリングに対する考え方なし枠組が述べられている。わかりやすい表現で淡々と語られているが、我々が臨床場面において平素自明のこととして安易に見過ごしてきたことを、一つ一つ丹念に掘り起こして説明され、著者のカウンセリングに対する秘めた情熱と誠実さをうかがわせる。なかでも第一章「カウンセラーとは何か」で、「実は、カウンセラーになるということは、まさにそのような（荒涼たる砂漠のような世界の中にある）人との関係性の中にわれわれ自身を置くということであると私は考える。」「なぜ関係性の確立が他者との間に作られなければならないか」といふと、（中略）一人であることの孤独が精神性を消耗し、枯死させてしまうものであり、過去経験は単なる夢幻様体験として、自分自身の中に定着することができないものだからである。（中略）したがって、カウンセラーがクライエントとの間に関係性を築いていくことは、関係を現実的なものとすることによってクライエント自身が他者との関係を現実的なものにして行き、クライエント自身の過去体験が、クライエントにとって現実的なものになっていくということを目指しているのである。」という件りは圧巻であり、ぎっしりと重みをもつたことばである。

第四章「被面接者の世界」は要領を得て明快である。筆者はまずクライエントのことばの内容について言及され、そこには3つの世界が包含されているという。第一は「今日はたいへん憂うつである」といった心理的世界、第二は「今日はこのようなことをしました」といった行動のレベルにおいて語られる事実の世界、そしてカウンセラーが注目しなければならないのは、いろいろな事実や行動が語られると同時に、その中に心理的なものがもり込まれながら語られる第三の世界であるといふ。これをさらに深めていくと、人間にはことばで表現することのできる経験的な世界以外に、どうしてもことばではピッタリと表現できない世界がある。即ちそれがイメージの世界やメタファーで語られる世界である。さらに、ことばを語りかけ、ことばでの話し合いを土台に

しながらもっと深い、あるいはもっと原始的な感覚でもって、クライエントは自分の世界を示す場合がある。これは原始感覚、夢、あるいは漠とした感じでいわれるもの、触覚、聴覚、味覚といった身体的感覚としてしか表現できないような世界であると述べている。このように複雑なクライエントのことばと経験の世界をわかりやすく説明され、さらに著者はそれを適確にまとめて図式化しておられる。的を得た適確な図式は一定の比較的単純化された要素ないし要素的構造を表わしながら、同時にその視覚的イメージに基づいて体験的な実感まで生むという効果をもたらすものであり、読者にとって有効かつ味わい深いものになっていると感じられた。

第六章「ロール・プレイによる技法訓練」からはいよいよカウンセリングの実習が展開されていく。第六章では学生同士が互いにカウンセラーとクライエントの役割をとつて体験を深め、第八章「試行カウンセリングの実際」では友人や知人を相手にして、学生がカウンセラーとなり、5回ないし10回、面接を限定してカウンセリングを試みている。この意味で回数は短いが本物のカウンセリングである。そこではまず、各回の面接ごとの逐語記録あるいは要約にスーパーバイザー(著者)のコメントが適宜加えられ、つぎにカウンセラーの体験のレポートと、それに対する技術上の問題点の整理という形式で進められていく。そして最後にクライエント自身の感想が述べられている。

これこそがまさに「試行カウンセリング」の意義を示すものであり、本書の中で最も色彩を放っている部分であると感じられた。実際カウンセリング場面でクライエントの瞬間瞬間の生の気持ちをセラピストが適確につかんでいるという保証は何もない。せいぜいケース・カウンファレンスやスーパーバイザーから指摘をうけたり、カウンセラーがもう一度面接状況を見直して推測できるだけである。カウンセラーの判断とクライエントの体験を照合し事実を検証できるのは「試行カウンセリング」の魅力であり利点であると思われる。とは言え、これは言うは易しいがなかなか至難のわざである。その点は著者の次のことばだけで十分であろう。「カウンセラーも、クライエントのことばによってカウンセラーの心に生起したもの、イメージ、体験その他を、意図的に選択し、判断し、言語化し、それがクライエントに受けとられる時に、はじめてカウンセラーと呼ばれるのである。」

第九章「カウンセラーの陥りやすい技法的失敗」はカウンセリング過程で一般的によく問題になる点を一つ一つ項目としてとりあげ説明がなされている。カウンセリング入門者にとって面接中の自分の行動やクセをチェックするのに便利であるが、それだけにもう少し詳しくふれて欲しいような気がした。

前に述べたように、本書は心理臨床の基礎的技術獲得のための手引書として書かれている。しかし読み終ってみると、それは決してカウンセリングの科学的技術だけではなく、いわば名人芸とも言えるカウンセリングの‘なにか’をも伝えている。おそらくこれは筆者が秘かに意図されたことであろう。元来この種の書は、謙虚な研究、実践の積み重ねによってのみ成し遂げられるものであり、当然筆者自身のカウンセリングへのアプローチそのものが浮き彫りにされてくる。現在最も必要とされているにもかかわらず、系統的に一貫したカウンセリングの入門書がほとんど見当たらないのはそのためであるかもしれない。あらためて筆者の試みと勇気に敬意を表し、本書の次の段階のものとして近く刊行される『カウンセリングのスーパービジョン』に期待したい。

神保信一・中西信男・富本佳郎・橋口英俊共著
学校相談心理学 金子書房 1978

学校教育の中で教育相談活動が実施されてかなりの年月が経過しているが、まだ日本の教育風土の上にしっかりと根をおろしているとは言いがたい。おそらくそれは著者等も述べているように、一方では狭い視野のカウンセリングの考え方とらわれることなく、カウンセリングを日本の教育の伝統や風土に根ざした生活指導の中にとり入れ、幅広い教育活動を推進することが必要とされている。が、その反面、ひとたびその構造が不明確なものとなると、現実の学校という機構の中では教育相談活動の位置づけをあいまいにし、その存在意義すら薄らいでしまうのかもしれない。その意味で著者等は、単にカウンセリングのみ、あるいは生活指導のみにかたよることなく、カウンセリングの働きを幅広く弾力的に学校教育の中にとり入れ発展させることを願って‘学校相談’ということばを用いておられる。本書は4人の教育相談の研究者であり実践者であるかたがたによって、教育相談の現状分析と問題の明確化、および将来の展望がなされた、いわば学校教育相談の総括編とも言えるものである。

第2章では学校相談に何らかの貢献をしている諸学派の理論と、その底にある構成概念について説明がなされている。それは精神分析的カウンセリング(主唱者:ボーデン)、特性・因子的カウンセリング(ウィリアムソン)、来談者中心的カウンセリング(ロジャース)、開発

的カウンセリング（ブラックター）、行動的カウンセリング（クルンボルツ）であり、各問題ごとにそれぞれからアプローチの方法が具体的に紹介されているのは本書に一貫した構成の特徴である。第3章で学校相談の特徴と限界にふれ、特に限界での「教師は医学的知識や病院実習などの経験がないのは当然であるが、それ故に勝手な思い込みや誤解のあることは、いくら注意してもしすぎることはない。」とか、「教育相談を担当する者は臨床家ではないから、十分に習熟していない複雑な検査などを用いるべきではない。」といった指摘は我々への戒めのことばとなろう。

第4章から第6章では学校における相談活動を便宜上その内容から人格相談、学習相談、進学相談に分け、ときには事例をまじえながら論述されている。人格相談であれ、学習相談であれ、生徒にとって学校自体が大きな意味をもっているのはもちろんあるが、学校生活の大部分を占めるのが学級であると考えるならば、どのような学級であるかが、問題解決に大きく左右する。「しかもなお、その学級担任教師の指導により、どのようにも変化し、発達するものであるから、人格相談のことを論すれば、学級担任教師の学級経営（学級づくり）を見直す必要がある。学級経営の中で、一人一人の生徒をどのようにとらえ、すべての生徒に対して、どのような指導仮説を立て、集団を通じ、あるいは個人的に働きかけ、配慮したかが大切である。」と学校相談の最も重要な基盤として、学級担任教師の学級経営のあり方に着眼されているが、これは著者等が特に訴えたかったポイントの1つであろうと推察される。

ところで、児童・生徒および親はカウンセリングをどのようにみているのであろうか。この問題については第8章「学校相談の評価」で論及されている。それによると、これまでの内外の調査から明らかにされているのは、悩みをもっていてもそれを実際に教師に相談しようとするものはごくわずかしかないということである。その理由としては「話しごくかったから」「話してもしかたがないから」という回答が多く、たとえ話したとしても満足感を感じたものは、小学生の90%に対して、中学生40%，高校生60%と低い。この結果1つとってみても、学校においてカウンセリングを充実していくのに改善されるべき点はいろいろと考えられよう。

第10章「帰国子女の教育相談」は今日的問題があつかわれていて興味深い。今までのところ帰国子女に対する指導についての研究・実践は試行的段階のものが多いとのことであるが、これも今後の研究に多くの期待がかけられよう。

こうして一読してみて1つ残念なのは、悩みをもつ生徒の相談内容の秘密を教師がいかにとり扱っていくかという具体的な問題についてほとんど言及されていなかつた点である。生徒から深刻な秘密を打ち明けられたものの、学校という機構の中の一教師として、それをどのように処理したらよいかわからずに、動きがとれず悩んでいるという先生方の声はよく耳にする。この問題は難問であるだけに、学校相談の原点であると言っても決して言い過ぎではあるまい。生徒の側からすれば、心を少しづつ開き話した内容が、ひょっとして漏れているのではないかという危惧の念を抱いた時から口を固く閉じてしまうだろうし、生徒が先生を信頼していればいるほど、期待に応えてくれなかつたり、裏切られたと感じた時のショックは大きいものである。こうなれば学校相談それ自体が成立しなくなる。この点についてそれぞれの著者の方からつっこんだご意見を示唆を与えていただきたかった。

春木豊編著 人間の行動変容 川島書店 1977

ここ十数年行動療法あるいは行動変容はめざましく進展し、その適用範囲は臨床から教育の諸問題にひろくゆき渡っている。行動療法あるいは行動変容が、心理学の実験的、理論的知識を応用し、人間の諸問題の解決を計ることを目的とするならば、人間のための基礎的学習理論とその応用である行動変容があらためて問われることになり、本書はそうした機運を反映して編集されたものである。

編者は序章「人間の学習理論と行動変容の現状」で人間の学習あるいは行動変容にかかる新しい強化の概念として、(1)代理強化(vicarious reinforcement), (2)自己強化(self reinforcement), (3)内潜強化(covert reinforcement)をあげ、さらにより包括的な人間の学習あるいは行動変容の原理について述べており、これが本書の構成の基本的な枠組をなしている。即ち基本的には伝統的な動物実験を中心に発展してきた学習のプロトタイプがあり、個人的で、他律的で、外顯的であるといふ三つの特徴をそなえている。それが人間の発達とともににより高次のものへと発展したとき、「発展タイプ」と総称される三つの学習の形態ができると考えておられる。そしてそれらをまとめて一つの体系の中に位置づけると、現実の人間の学習の形態は、個人的——社会的の軸を社会的学習の次元、他律的——自律的の軸を自律的

学習の次元、外顯的——内潜的の軸を内潜的学習の次元とする三つの次元にまとめられるという。この考え方方は編者も言うようにまだ試み的なものではあるが、今後の展開を押し進めていくうえで重要な手掛かりとなることはまちがいあるまい。

第1章「社会的学習の理論」では社会的学習の典型的な様式である模倣学習と観察学習の研究法上ちがいと、理論的な問題点が多く研究を引用しながら概説されている。模倣学習については主に Miller & Dollard の研究を柱に説明が進められ、模倣学習の理論では十分に説明しきれない興味ある現象を観察学習としてつかい、三つの理論を紹介している。具体的には(1) 強化媒介理論、(2) 接近媒介理論、(3) 認知理論である。

こうした社会的学習理論の背景になっている基礎的研究は、第3章「社会的学習理論の基礎研究」でとりあげられている。元来、動物を用いた研究が、そのまま複雑な人間の行動に当てはまるとは限らないが、人間の問題をより深く理解するためには重要な手段の一つと考えられよう。その意味で社会的促進の動物実験研究は興味深い。

話は多少前後するが、社会的学習の諸理論を人間の行動変容に適用した研究が概観されているのが第2章である。その適用範囲は、思考的行動、言語行動、運動技能、社会的行動、教育活動、行動異常と広い領域に及び、引用された理論や研究も2章だけで220を越え、内容は豊富である。なかでも行動異常の治療にモデリングを適用した報告例は教示されるところがあったが、治療の手続きや技法の問題、モデルの行動内容だけでなく、クライエントにとってモデルがどのような存在であるのかという、いわば治療場面におけるモデルの機能的価値の吟味は検討する余地が今後に残されているように思われた。加えて、クライエントに新しく形成された行動が治療場面をはなれても長い間持続されるためには外部的統制条件の内在化が必要であり、この点についても行動論的考察はまだ不十分である。こうした問題を解明していく一つの手掛かりとして、人間の認知的侧面へ行動論的にアプローチしようとする自己強化の概念は、第4章「自律的学習の理論と行動変容」で詳細に論述されている。

第4章では人間の行動の自律化、自己統制を確立するものとして自己強化機能をとりあげ、その形成過程を外的強化学習とモデリングからアプローチしている。それによると、両アプローチは手続き上の相違もあり、かつ各実験はそれぞれ一方のアプローチだけに準拠して、両者の相対的効力を比較し結論づけることはできないが、賞であれ罰であれ強化が与えられる理由、根拠が

被験者に納得されているとき、はじめて期待する効果は大きいという結果がでている。また心理療法への適用にあたっては負の自己強化の手法より正の自己強化の方が中心で、望ましい効果をあげている点は両者に共通していると述べている。

第5章「内潜的学習の理論と行動変容」では、内潜的学習を内潜的次元（内潜条件づけ）を軸として、それと社会的学習の次元とが交差する面（内潜モデリング）およびそれと自律的学習の次元とから構成される面（内潜オペラント）に位置づけている。即ち条件づけやモデリングやオペラントの理論をイメージの世界にまで拡張しようとするもので、臨床では最も幅広い適用範囲をもつ可能性が期待できよう。しかし実際に内潜的学習の技法を治療に用いた場合、人間のイメージを統制することはかなり難しく、そのため治療的操作と変化過程の具体的記述が曖昧になったり、治療者の一方的な解釈に終わる危険性を備えていると思われる。その意味では成功例だけでなく、むしろ失敗例の再吟味の中からも貴重な資料が得られるのではなかろうか。

これまで臨床心理学の立場からみてきたが、本書は臨床心理学書とするにはやや趣を異にしている。とはいえる、心理臨床にとって行動的アプローチが現在においても、また将来においても非常に有効であることは今さら言をまつまでもない。編者も終章で「人間と人間との間で行なわれる行動制御のばあいには、制御するほうもされるほうもともに制御しつつ、されつつの状況にあるといえる。このような力動的関係のなかでの学習についての分析はこれからテーマといえる。」と述べているように、セラピストの「うなづき」（強化）一つとっても、それがいつどの程度なされたか（強化の質と量）によって、クライエントの次の発言内容（反応）を意図的にも無意図的にも制御しているのであり、その逆の現象も起っている。このように制御者と被制御者が相互に力動的に関係し合う、相互的制御の問題の解明はこれから研究に負うところが多い。そこで今後は実際の治療場面で得られた経験や知識をもとに、従来の学習理論を検証、修正していくというアプローチも一方ではこれまで以上に必要になるのではないかと思われる。

おわりに

以上、臨床心理学に関する良書について私なりの感想を述べさせていただいた。ここでとりあげた書は広いジャンルに及んでいるため、すべての書をまとめて論ずることはなかなかむずかしい。それでも臨床心理学に関するおびただしい数の専門書が出版されている今日、

初心者にとっては選択に困ることもある。いろいろな領域から系統的に一貫してではなく、むしろ無秩序に刊行されているという感がないわけでもない。たとえば事例のとりあげ方1つにしても、本来は臨床理論と臨床実践をうまく橋わたしする役割を担うものでありながら、扱いようによっては臨床心理学的技法を小手先的なものとして伝えてしまうことにもなりかねない。その意味ではここでとりあげた書の筆者や編者は、1つのテーマに

終始一貫してとりくまれ、実践研究を通して何らかの体系化がなされているので、心理臨床の研究者や実践家はもちろん、広く人間研究に興味をよせる多くの人たちにとって頗もしくもあり有意義でもあろう。今後もこの類の書が出版されることを心から願いたい。

評者 淑徳短期大学

神田久男